

---

# 海洋底の気泡

富士堂あかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海洋底の氣泡

### 【Zコード】

Z5262Z

### 【作者名】

富士堂あかり

### 【あらすじ】

恋は人を盲目にさせるというが恋が終わった後一人はどうなってしまうのだろうか。一人の将来に不安を持つ男と心が不安定な女の

お話

ああ、と義久は開口一番にそう言つた。それ自体はなんの意味ももたない普通の言葉である。しかしそれは彼女を酷く苛立たせた。

二人が一緒に住み始めてから1年が過ぎた。結婚はまだしていないや、このまま一人が続くかどうか傍から見て疑問だつた。

義久は彼女、美央がいつものそれだと瞬時に分かつた。だからこそあの言葉だったのだがそれを当たり前のように受け流されることはが彼女には許しがたいことだつた。

女の苛立ちは部屋の空気を変え、義久は酷く居心地が悪く感じた。しかし自分にはどうすることも出来ないのだ。

付き合おうと言い出したのは義久の方だつた。在学中からずっと好きだつた、大学を卒業するとき、このまま言わないで後悔し続けるより、そう思つて意中を告げた彼にとつて美央が恥ずかしそうに笑つて自分の手を握り返してくれたことは今でも強く思い出に残つている。

それから一年ほど付き合つて、お互い仕事にも前ほど苦痛だと思わなくなつた頃、一つのアパートを借りて同居が始まつた。しかし問題が発生した。美央は酷く癪癥持ちというか、少し情緒不安定だつた。今まで外でしか、一時的にしか会わなかつた義久にとつて理由も分からぬまま泣き叫んだり死んだように横になつてゐるのを見るのは予想だにできなかつたことだ。

美央は理由なく泣くことが多かつた。いや、理由がないはずはないのだが義久には理解しがたいことばかりだつた。女特有のそれなんか、知人に一度相談したことがあるが何處もそんなもんだと軽くあしらわれた。しかし彼には美央が正氣の沙汰だとは思えなかつた。

ある時、義久は泣き叫ぶ美央に怒鳴り散らした。彼女は放心したようこここちらを見ていた。お前のせいなのに、どうして俺が怒つてののか分からないうつていうのか、お前はいつまでも泣いてるし、理由を聞いても何も言わない、俺にどうして欲しつて言つんだ、お前はどうしたいんだ。

義久は沸きあがつた頭を静めて病院にいり、そいつてひそかに調べていた精神科に美央と一人で行つた。診察室、彼女の気持ちを分かつてやりたい、そう思つていた義久は診察中ずっと廊下の長いすに腰掛けていた。怒りが湧いた、お前はどうして俺に何も言つてくれないんだ、と。

愛してるからこそ、大事に思つているからこそそんな不安定な美央に付き添い、泣き止むまで背中をたたいてやつたりもした、付き合つてから長いが彼女が喜ぶであろう場所につれてつたり、どうして彼女はいつも俺を睨むように泣くのだろうか。彼女は何が気に食わないんだろうか。

自分の美央に対する愛が分からなくなってきた。今までずっとあつたはずのそれは酷くもやもやしてそれは彼女の気持ちを裏写したしたものなのかと漠然と恐怖した。

もうだめなのかもしれない。このまま一緒に居ても何も解決しないのかも、彼女はいつまでもヒステリックな声を上げ、空っぽの器のようになに俺を恨んで生きていくのか、と。

「美央、俺達、どうしようか・・・」

美央は答えない。生氣の抜けたガラスのような目がぼんやりと義久を映している。

「大事な話なんだ、このままだと俺達は幸せにはなれない……一緒に暮らしていくことは出来ない」

美央が俺から離れたいと思つてているのなら、他に好きな人がいるのなら別れようと言つ事、家は自分が新しいとこを探したつていいと いうこと、一人でやつていきたいと美央が望むなら一緒に頑張ろう ということ、義久が考えて実現可能だと思つたことは全て話した。しかし、美央は依然黙つたままだ。死んでるほうがましだった。

「美央……！」

義久にはどうしたらよいか分からなかつた。その時彼女を抱きしめたのは無心の策だったのか、彼女と別れたくないとう本心からなのかは分からない。泣けてきた。彼女が分からない、ただ向かい合つて全て話し合いたいだけなのに、気が付けば泣いていた。声を抑えることが出来なかつた。美央もすすり泣いてることに気づくのにそう時間は掛からなかつた。胸の中で、お互いの頭を預けるようにして二人は年も忘れ泣いていた。

「……あのね、義久君」

「う、う、んつ……」

「私……あなたのこと我が分からぬの、だつて、つわたしい……・ 義久君に、何もしてあげないもの・・ 義久君みたいに、つぐ、なんでも出来ないの……」

「美央……」

「全部、私の考えてること筒抜けだつたから……私のして欲しい

「」と、全部してくれたから……でも、私は義久君のして欲しいこと、分からぬの……。」びつしたらしいか、わからなくて……」

美央の弱弱しい声が耳元に重なる。ああ、と義久は脱力した。びつしてそう、女つてのは。

「美央は馬鹿だつ・・つぐ、俺が、何も貰つてないとでも……？俺が、お前のこと、なんでも分かつてゐて……？」

「・・・つぐ、ひづり・・・」

「好きじやなかつたらじうしたこと、しねーよ・・・」

「でもつ」

「・・・一緒にいたいからひづしてゐるんだろ・・・」

目が覚めると美央と二人、ベッドの中にいた。そういうえば随分と長い間別々に寝ていた気がする。ソファで寝る美央の姿が瞼に浮かび毛布をかけなおしてやつたことを思い出し笑つた。美央は疲れてまだ夢の中のようだ。朝飯は自分が作ろうかと思いかけていや、と。折角の二人の家なのだ、たまには一緒に作るのもいいかもしれない、そう思つて目の前で眠る彼女の幼い顔を見ながら何を食べようか、なんて考えてた義久であった。

(後書き)

色物じゃない作品はこれが初めてなのですが普通のお話って難しいですね。なかなか難産でしたがいかがでしたでしょうか。あまり明るい話ではないのですがこういうのもありなのかな、と。男性にリアリティを持たせるのはやっぱむずい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5262z/>

---

海洋底の気泡

2011年12月17日21時49分発行